

佛蘭西書巡覧 13

平山 弓月

『パンセ』の世界とは、
一つの高次の実在としてそこに存在する。



田辺 保

パリ3区、サン・マルタン通りに、居心地のいい博物館があります。訪れる人が少なく、その分ゆっくりと静かに展示物を見て回れるという意味です。その名を、*Le musée des arts et métiers*（技術と仕事に関する博物館）といい、フランス人のさまざまな歴史的発明・工夫の成果を展示しています。そこに、現代の複雑化した計算機の原型のような、17世紀に作られた加減計算機が、誰でも手にとって操作できるようにして展示してあります。考案したのはブレーズ・パスカル *Blaise Pascal(1623-1662)* という名の、日本では一般に哲学者思索家として知られている、一人の天才です。今回は、先稿で紹介しましたデカルトの『方法序説』と並び立つ、パスカルが遺した『パンセ』*Pensées(1670)* に触れてみたいと思います。

皆さんは、*L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.*（人間は一本の葦にすぎぬ。自然の中でいちばん弱いものだ。だが、人間は考える葦だ）とか、*Le nez de Cléopâtre: s'il eût été plus court, toute la face de la terre aurait changé.*（クレオパトラの鼻、それがもう少し低かったら、地球の全表面は変わっていただろう）などの言葉を、どこかでお聞きになったことがおありでしょう。

パスカルも、デカルトがそうであったように、もともとは「パスカルの定理」などでわかるように数学や物理学で多くの業績を遺した科学者でした。天気予報で耳にする、気圧の単位「ヘクトパスカル」は彼の名を讃えて、それまでの「ミリバール」に変えて使われるようになりました。

パスカルはこのように科学者としての人生を歩み、さまざまな器械を考案したり、はたまた乗合馬車というシステムを考え出し、実際に運営をもちたりしました。社交界にも出入りし華やかな俗生活を一時は送りました。しかし偶然のきっかけで、宗教に目覚め、そこからは熱心なジャンセニストとしての信仰生活に入っていったのです。『パンセ』は信仰生活の中で、キリスト教を擁護し、

信仰をもたない人々を信仰の道に導き入れる目的で、パスカルが書き綴った多くの断章を、彼の死後周囲の人々が編集したものです。初版は不完全なものでしたが、その後ブランシュヴィックやラフュマといったパスカル研究者によって、断章の配列が研究されました。こうした研究者の手によって、現在私たちはパスカルが目指したものをほぼ正確な形で読むことができるようになったのです。

キリスト教擁護論といっても、『パンセ』に読まれる断章の多くは、私たち人間を対象に深く考究したものなのです。私たちの周りには、習慣や想像力、そして自尊心などと呼ばれるものがあり、パスカルはそれらが、正しい判断に私たちがたどり着く邪魔をしているといいます。

ではどうすればよいのでしょうか。*Différence entre l'esprit de géométrie et l'esprit de finesse*（幾何学の精神と繊細の心の違い）、この両者の違いを明確に認識しなければならないとします。前者は全てを定義とか原理とかに立脚して理解し判断を下そうとするもので、きわめて科学的であり明快なものなのです。デカルトの立場がこれに当たるといえます。それに対して後者は、「よく澄んだ眼を持たぬかぎりその原理を把握できぬ心の働き」（田辺保）を指しています。つまり感情や直感といったものに基づいています。パスカルはデカルト的合理性を否定はしませんが、それよりもさらに重要なものとして感性的であるということをお説いているのです。こういった観点から見れば『パンセ』は偉大な人間研究の書であるといえるでしょう。

現代という、価値観が混沌とした時代に暮らす私たちは、デカルトもパスカルもともに腰を据えて読む必要があるでしょう。一方の立場にだけ傾くことなく判断を下せれば、私たちは慌てふためくことなく生きて行けると思います。（本稿を記すにあたり、田辺保先生の著作を参照させていただきました。）

ひらやま ゆづき（教授・フランス語・フランス文化論）